

アンドレーエフのフェリエトン —俗物インテリへの憎悪とジレンマ

塚 原 孝

1

レオニード・ニコラーエヴィッチ・アンドレーエフ Леонид Николаевич Андреев は1898年4月5日、日刊紙「クリエール Курьер」に「バルガモトとガラシカ Баргамот и Гараська」を発表する。この小品に目を留めたゴリキーとの知己を得たことを契機としてアンドレーエフは本格的な作家活動を始めることになるが、以降「クリエール」紙はアンドレーエフの中心的な作品発表の媒介であった。「クリエール」紙は1904年7月に事実上廃刊となるが、その間31本もの作品が同紙を通じて発表されている⁽¹⁾。一方そもそもが同紙の法廷記者であったアンドレーエフは、1900年1月27日に「印象 Впечатления」というフェリエトン⁽²⁾を寄稿して以降1902年までの短期間に、この「印象」そして日曜日に掲載した「モスクワ、生活の些事 Москва. Мелочи жизни」という題名で、実に200篇を越えるフェリエトンを残した⁽³⁾ フェリエトン作家でもあった。

題名に採られた生活の些事という言葉も示すとおり、アンドレーエフがこれらのフェリエトンで描いたのは、彼が日常生活の些末な事象の中にこそ反映されると考えた社会の矛盾、ないしはその矛盾した世界に生きる人々の動揺や混乱であり、「社会に潜むディッソナンス」[7:23]を明らかにすることがテーマの一つであった。そこで取り上げられている題材は様々であるが、特に注目すべきは、アンドレーエフが同時代人をほぼ例外なく矛盾に充ちた存在と捉えていることである。1900年3月16日のフェリエトン⁽⁴⁾でアンドレーエフは同時代人を指して「最も矛盾し合った気分、最も相容れない根源、最も反目し合った視点が緊密に絡め合わされて一つ完全な雑色の塊りとなっている。一方に触れようとすればもう一方にも触れないでは済まされない。この20世紀の人民、現代のスフィンクスとは何者なのだろう」[1:6-176]というが、アンドレーエフが他のどの階層の人々にもましてこの分裂し矛盾した内面を持つ存在であると捉えたのが、1901年1月28日のフェリエトン⁽⁵⁾で「哀れみと笑いを誘い、いずれにせよ非常に特異であって過去のどの歴史にも見られなかったような悲劇的な状況にある」[2:6-422]というロシアの俗物インテリたちであった。

アンドレーエフは何度となく彼らの話題を取り上げては、明らかにその擁護ではなく攻撃の姿勢を取っているが、一方でこの過程は、確かにアンドレーエフ自身の問題としても捉えられ、語られている。そしてこの追求は、問題の解決ではなく、激しいジレンマだけを残す結果となって

いるのである。本稿においては、これまであまり顧みられることのなかったアンドレーエフのフェリエトンのうち、特にこの俗物インテリを巡って書かれたものを取りあげ、そこでアンドレーエフが同時代のインテリたちの本質をどう捉え、何を問題視し、その問題の追求の結果陥ることになったジレンマとどのように向き合ったのかを検討することで、作家アンドレーエフを支える思考のベースの一端を明らかにする。

2

アンドレーエフによって俗物インテリがどのように捉えられているか。それを端的に示しているのが1901年9月14日のフェリエトン⁽⁶⁾である。モスクワを代表するという三人の文化人が気球遊覧をするこのフェリエトンでは、その後半部分で、気球の曳きずるガイドロープに家を壊されたことに激怒し石を投げつけようとする夫婦に対して、あるいは気球に驚いて銃を発砲する農夫に対して、気球の三人が「ロシア人であるのは何と恥ずかしいことか」[2:6-430]といい、「この無学な人民を目覚めさせるにはどれだけの労苦が必要なことか、考えるのも怖ろしい」[2:6-430]と嘆くという様子が、上空から下界を見下ろすという象徴的な位置関係を伴って描かれている。アンドレーエフが捉えるのは、自分たちは世界の上位に立っていると何の疑問もなく考えるインテリの姿であり、彼らが他の階層、特に大衆と呼ばれる層とは完全に分離していると認識し、あからさまに蔑視しているという状況である。さらに1900年10月29日のフェリエトン⁽⁷⁾では、無学な大衆との間にある絶対的な格差を語るのは「私」として登場するアンドレーエフ本人であり、アンドレーエフには気球に乗船し大衆を見下す上位層の一員であるという自覚があることが窺える。アンドレーエフはインテリ層と大衆の間であって、中立・客観という姿勢を保つというスタンスを取ってはいないのである。

全集収録時に「不協和音」という題名を与えられるこの1900年10月29日のフェリエトンは、観劇のためにモスクワ芸術座へ向かおうと雇った御者がどう説明しても劇場の場所を理解しないことに、「私」がまさに「不調和」を感じその無知に驚愕する場面から始まり、後半では、終演後帰宅するために雇った別の御者との間に感じられる一層の不調和に耐えきれず、その御者に「お前は俗衆であり、犬畜生であり、愚鈍で物の分からない多数者の一人にすぎない」[1:6-333]と言い放つというものである。知的で常に精神的高揚を探求している「私」は、高尚な問題については何一つ理解できない大衆と呼ばれる人々の生活する俗悪な世界とはかけ離れた所にある世界に生き、両者は埋めることのできない「不調和」と「深淵」によって完全に分離している。ここでは確かにアンドレーエフ自身がそのように実感しているのである。

ここで大衆に対するアンドレーエフ自身の侮蔑があからさまな一方、そこに同情や哀惜の感情が存在しないことは特徴的である。小説家としてのアンドレーエフはこの時期の短篇では「本 Книга」 「別荘のペーチカ Петька на даче」 「土産 Гостинец」などで大衆の生活を捉え、ゴースリキ

一が絶賛した観察眼の鋭さで確かにその困窮や抑圧の状況を的確に描いている。しかしこれらの小説でも、作者であるアンドレーエフの側からの歩み寄りや救いの手が差し出されるさまが描かれることはない。作者の眼前で大衆はどこまでも困窮と抑圧に沈み込んでゆくが、アンドレーエフは何の感慨もなくそれらを写し取るのみなのである。フェリエトンに戻れば、すでに挙げた1901年1月28日のフェリエトンではやはり非常に高みにいて自分に強大な力が備わっていることを想像するインテリが描かれているが、貧困に喘ぎ、抑圧されながらも力強く生活する大衆はここでも遠く下方にかすかに感じられるだけで、両者の間に接点や相互理解は存在しない。

世界の上位に自らを置きながらその周囲を見下すという高邁ともいえるインテリの意識を捉え、自らもその一員であることを示す一方で、冷静な観察者としてのアンドレーエフは、同時に、その上位にいるはずのインテリの実体がいかに虚偽に充ちているか、その存在基盤がいかに脆弱であるかを暴く。中でもアンドレーエフはインテリを支配する「灰色の生活、退屈な生活」という感覚に敏感に反応する。その事実を明らかにし原因を探ることでアンドレーエフはインテリの本質を捉え、結果としてジレンマに陥ることにもなるが、彼自身も送っているインテリの日常は1900年8月13日のフェリエトン⁽⁸⁾で次のように描かれる。

奇妙な感覚だ。我々が何を話してももうそのことを話したことがあるような気がした。いつか昔というのではなくつい夕べに。それほど鮮やかに言葉と感覚が記憶の中にある。私は笑おうとした。と私には昨日もそして一昨日もこのおなじ話題で笑ったような気がした。腹を立てようとしたが、やはり昨日も一昨日も腹を立てていた。[2:6-398]

どうしてもなく退屈し、その退屈しのぎに取りあえず社会状況について話をする「我々」が描かれるこのフェリエトンでは、執拗に「退屈」「あくび」という語が繰り返され、そのことからアンドレーエフが捉える彼らの日常の実態が明らかである。しかもアンドレーエフは彼らの言葉は朝から何度も新聞で目にし、耳にし、口にされた言葉の反唱にすぎず、そこに意図や意識が存在しないことを捉える。だからこそその言葉は語られれば語られるだけ一層退屈さを増長するものだと描かれるが、注目すべきは、彼らインテリが自分たちの言葉やその内容が何の意味も持たないこと、さらに生活自体も無意味なまま繰返されていることを感知しその感覚を共有していることである。

ではインテリが単調で無意味な生活を送っているのならその原因は何か。アンドレーエフは1900年1月28日のフェリエトンで、インテリには生活上のあらゆることに対してすでに決まった規則が用意されているからだと捉える。「諸規則がどこから現れたのか、誰が思いつき、作り上げ、生活の中に持ち込んだのか知るものがあるろうか。しかし諸規則は柵となって立ちほだかり逃げ場はない。あっちでもこっちでも不意打ちのように規則が現れて額をぶつけてしまう」[2:6-

420]というのがアンドレーエフの観察である。文法規則から別れ際のハンカチの振り方、果てはなるべくエネルギーを損失しないような洩のかみ方に至るといふ膨大なインテリの規則を想定するアンドレーエフは、ここでさらに進んで、最大の問題は彼らインテリが既にその規範の中でしか存在できない状態に陥っている点であるという。仮に彼らがその事態を認識しても「自ら考え決定する」という経験を持たない彼らにはそもそも手段がなく、唯一の拠り所である既存の規範に盲目的に従わざるをえない。だからこそアンドレーエフは1901年2月11日のフェリエトン⁽⁹⁾でインテリの存在について、「ただ組織の中でだけ彼らは自分自身が足も手も舌もある人間であると確かめられるのだ。組織というものがなければ彼は無であり、汚らしいポロであり、しみであり、濡れた鶏であり、何でもよいのだがただ人間ではない。彼に組織を与え、登録してやり、会員証と制服と行動規則を与えれば、彼は自分の中にサムソンほどの力を感じるだろう。(中略)見方を変えれば、組織化されていないインテリほど無力で受動的な存在はない」[2:6-426]と記すのである。

加えて他に自らの拠り所となる基盤が存在しえないという事実は、その既存の枠から外れることに対する神経質な恐怖を生む。横並びを求め他者と自分が同一であることを確認し続ける中でのみ彼らは安心を得るのだとアンドレーエフは捉え、帽子を被らずに外出したために警察沙汰になったという友人の話を描く1902年5月5日のフェリエトン⁽¹⁰⁾で、「自由と自制について語るあなたは考えたことがあるだろうか、あなたが帽子を被るのはあなたが被りたいと思うからでなく、そうしなければならないからなのだ」と[1:6-169]と述べる。さらに後に「インフルエンザ患者、神経衰弱患者、アル中患者」という題名を付される1900年11月12日のフェリエトン⁽¹¹⁾では、彼らが社会的な流行り病であると聞けば、その病気に罹ったことを嬉しく思うのがインテリであると描かれる。インテリにとっては没個性という問題よりも逸脱することによる自己の存在基盤の喪失の方が恐怖であるために、彼らはむしろ喜んで個性を抑圧し盲目的に既成のルールに従う。明確な自我や意識、思考が奪われ、生活が単調で無意味な連続の中に埋没するのはむしろ当然であり、その結果「彼らインテリは朝から夜遅くまで、自分たちでも笑ってしまうような意味のない、馬鹿馬鹿しい行動を繰返す」[2:6-427]こととなり、「眠たいのに夜通し起きているかと思えば、とても興奮している晩に寝てみたり、話をしたいときに本を読むかと思えば、本を読みたいときに話をする。というように、ほとんど毎分毎に自分の望んでいることとは違うこと行動をとる」[2:6-427]ような虚脱感に満ちた現実感の伴わない生活へと移行するのである。

そしてここでも問題なのは、生活が望むようなものではないことに彼らが気づいている事実である。1900年12月24日のフェリエトン⁽¹²⁾でアンドレーエフはそのことを捉え「現代人はよく知っている。彼らはこうであつたらいいと思われるのとは全く違うふうに生活していること、どちら側に足を踏みだしても彼らの望みからは遠ざかってしまうことを」[2:6-415]と記す。生活が不毛で無意味なままに送られ自分たちでもそのことに気づいていながら、他に手段を持たないため

にすべてを承知しながらもその生活を続けざるを得ない。そのようなインテリの現実を捉えるに及んで、アンドレーエフは自分もまたその一員であり、同じ虚無感や喪失感を実感するがゆえに強烈なジレンマに直面するのである。

3

インテリの本質を明らかにする中でアンドレーエフは却って対処のできない現実直面することを知る。しかもそれは自分自身の現実を反映したものでもあったために、アンドレーエフは一方で、不毛な「灰色の生活」に対する嫌悪感をあらわにし、何とか豊かな「生」を手に入れようという方向へ向かう。1901年12月30日のフェリエトン⁽¹³⁾では、太陽を避け日陰を選んで生きようとするような人々を「集った蠅も死んでしまうような俗物のベシミスト」[2:6-467]であるとして攻撃し、すでに挙げた1902年5月5日のフェリエトンではわざわざイタリック体で「陽気に生きなければならない」[1:6-171]と繰返している。人生は積極的に生きるべきもの、時代は陽気で明るいゴリーキーの時代へ移りつつあるといい、その思想の強い影響下にあるとされるショウベンハウエルに関して「ショウベンハウエルを読んだときほど人生を信じたことはなかった。あのようにならながらも彼は生きた。つまりそれほど人生は強く、無敵であるということだ」[2:6-433]というもまさにこの時期のフェリエトンにおいてである。そして何とか意味のある生を見出そうという、結局は空しい結果に終わる模索の過程はたとえばイブセンを巡るフェリエトンの中に追うことができる。

アンドレーエフはモスクワ芸術座で上演された「野鴨」「人民の敵」「我々死んだものが目覚めたとき」にそれぞれフェリエトンを書き⁽¹⁴⁾、このことからイブセンに対する関心の大きさが分かる。ショウベンハウエル云々の記述があるのも実は「野鴨」に関するフェリエトンであるが、アンドレーエフにとってのイブセンは、何よりも彼自身がフェリエトンで描き出そうとした、盲目的な行動に支配される人間の愚かさ、大衆を見下すインテリ層の醜悪な実体を白日の下に晒すことに成功したという点で驚嘆に値するものであり、だからこそイブセンのいずれの作品も高く評価している。その意味でイブセンはアンドレーエフの見解の代弁者であり先達であったといえるが、そのイブセンが舞台上で描き出す現実は少なくともアンドレーエフにとっては厳しいものでもあった。「野鴨」の中にアンドレーエフが見出したのは「人生を肯定し深化させるものが真実であり、人生を害するものはいつでもどこにあっても嘘である」[2:6-433]ということであり、各々が自分にとっての「鴨」となる真実を持つこと、さらに言えばその「鴨」見いだす能力を持つことこそが重要なのだと悟る。これはちょうど一年前、ロスタンの「シラノ・ド・ベルジュラック」に触れた1900年9月17日のフェリエトン⁽¹⁵⁾で「人生の真実とはそれぞれの人間がその人生から得ようと望む何物かであって、だからこそ人それぞれに異なるかもしれない」[2:6-401]というアンドレーエフの見解がイブセンによって追認された形である。しかしこのような真理が確認されて

しまうことは、アンドレーエフにとっては救いではなかった。「小天使 Ангелочек」「土産 Гостинец」「外国人 Иностранец」「友人 Друг」といったいずれも社会の下層階級の人々を描いたこの時期の作品で、それぞれの登場人物は確かに彼らの「鴨」が出現することによって夢に見た幸福と平安を手にするができる。ところがこれらの物語は例外なく、結末部分でそれぞれの「鴨」が失われることによって訪れる悲劇の場面を持っているのである。極端に悲観的ともいえる世界観を持つアンドレーエフのような作家にとってみれば、この「鴨」は、それによって得られるであろう幸福ではなく、むしろ「鴨」が消失してしまうかもしれないという懼れ、さらには幸福は必ず失われることが運命づけられているという予見のみを強く意識させたのである。しかも激しい虚脱感に襲われ最も「鴨」を必要としているインテリには、「鴨」を自ら獲得する能力自体が欠けているのだとアンドレーエフはすでに見抜いているのである。

またアンドレーエフは、たった一人で全世界と対峙しようとする「人民の敵」のストックマンにニーチェの「超人」然とした姿を見いだしその孤高の正義に言葉を失う。しかしアンドレーエフの認識の中では理性や自我というものは本能や無意識の力の前には屈するしかなく、超然たる自我に裏打ちされた「超人」は誰よりもアンドレーエフ自身にとって到達しえない境地であった。しかも自我を欠くことで自らの存在を保っていると捉えられるインテリにその可能性のないことは、ストックマンに心打たれたはずの人々が劇場を一步出た瞬間に彼に向かって石を投げつける哀れな群衆になりさがってしまうことを見抜き「人々は、彼らがまさに、自由と権利と正義に対する最大の罪人であることを失念しているのだ」[1:6-322]描くアンドレーエフにとっては明らかであった。

加えてハウプトマンの「ミハイル・クラメール」に寄せた1901年11月4日のフェリエトン⁽¹⁶⁾で、「うまく生きることができなければ、死がうまくいくように」というニーチェのツアラトゥストラの言葉の通りに自らの命を絶った主人公ミハイルを讃える一方で、アンドレーエフ自身は「セルゲイ・ペトロヴィッチの話 Рассказ о Сергее Петровиче」で、「超人」になれないことを悟りその教えの通りに選んだはずの自死に際してさえ不首尾なままに終わる主人公セルゲイの姿しか描けなかったということが、ニーチェが、特にアンドレーエフ自身にとって思想上の拠り所となりえなかったことを如実に示している。さらに何度も自殺を企てたアンドレーエフ自身の過去を振り返っても、そこにあるのは理性的、論理的思考による選択などではなく、突発的、感情的要因でしかなかった。だからこそアンドレーエフは、完全な自我と理性を恃んで昇華しようとするストックマンに対して圧倒的な尊敬の念を覚える一方で、それが可能であること自体に対しては「憎悪が溢れた」[1:6-333]と認めるのである。

またインテリの間でやり取りされる大量の手紙や招待状を彼らの不毛な日常の例として挙げ、「本当に必要なものはたった数枚にすぎず、そのほとんどは何の意味のないもの」[2:6-417]としながら、それでもそれが送られてこなければ世界から忘れられたような気になるだろうと記して

いることから明らかなように、アンドレーエフがあまりに孤独に対して耐性を持たなかったことも重要である。アンドレーエフは冷静な観察眼を持ちながら、彼一人世界と対峙することができるような人間とは真逆、つまり圧倒的に感情的な弱くて脆い人間だったのである。

4

自分を含めたインテリの救いのない実体を暴き、新たな時代が到来しているという予感の中で積極的に生きることの可能性さえあり得ないことを見いだしたアンドレーエフはどこにその救済を求めたのか。それは非常に消極的な方法である。1900年12月24日のフェリエトンで描かれるように、何よりもアンドレーエフは彼の目をごまかし、欺いて欲しいとひたすら願っているのである。「人々がお互いに笑い、ただ素晴らしいことだけを語るようであってほしい。全世界が祝祭の日のように着飾ってほしい。私は欺かれないのだ」[2:6-417]。「私が願い、必要としているのは、私を欺いてもらうことだ」[2:6-418]とアンドレーエフは語る。超人となるにはあまりに人間的であり、現実を無視するにはあまりに過敏であったアンドレーエフにとっては、唯一、すべてを把握し了解した上で公然と「欺かれる」ことにしか救いの道を求めようがなかったのであり、まさにそこにこそアンドレーエフの特質と悲劇があったといえる。

それでもアンドレーエフは、世界は自らが捉えてしまったものとは違はずだと信じようとし、目の前に立ちだかる世界からの脱出を試みては、どこかにあるはずの別の世界、あるいはそこへ到達させてくれるような絶対的な解答を模索し続ける。例えば「思想 Мысль」のケルジェンツェフを描くことで否定したはずの「完全な理性」が、その後も繰り返し取りあげられてはその都度否定されるというように、一度開いたはずの扉を何度も覗いてはその向こうに出口がないことを再確認し、一層絶望を深めるのである。

後年フィンランドへ移住し文学活動からは遠ざかってゆくアンドレーエフが、自ら舵を取って何ヶ月も航海をするかと思えば、何十枚もの写真を毎日撮り続けるというようなことは、アンドレーエフの現実逃避の傾向の強さを示す例であるともいえるが、彼をそのような方向へ押し進めたのは、「見えすぎる」ために意図しない現実を見ざるをえなかったアンドレーエフが直面せざるをえなかったジレンマであり、今回検討したアンドレーエフの最初期に書かれたわずかなフェリエトンの中にもこの特徴的な思考の一端を垣間見ることができる。その意味において、わずか2年半ほどの間に書かれ、これまでごく一部を除いては触れられずにきた多数のフェリエトンも、作家アンドレーエフの人間像を浮き上がらせるためには充分にその価値のあるものであるといえ、今後の研究課題としてさらに注目し、検討すべきものであると思われる。

[注]

- (1) 1898年から1904年にかけてアンドレーエフが発表した48本の作品のうち、7割を越える31本が「クリエール」に掲載された。

- (2) フェリエトン (фельетон) の日本語訳には「時事漫筆 (コンサイス露和辞典第4版)」「世相戯評 (研究者露和辞典)」などがあるが一般的でないと思われるので、本稿においてはフェリエトンの語を使用した。
- (3) アンドレーエフが「クリエール」に掲載したフェリエトンは「印象 Впечатления」の題名で1900年に86本、01年に50本、02年に9本、また「モスクワ、生活の些事 Москва. Мелочи жизни」の題名で1900年に26本、01年に36本、02年に16本、さらにこれ以外に10本を含めて計233本である。
- (4) 「クリエール」紙に掲載されたアンドレーエフのフェリエトンはそのごく一部が全集に収録されているが(1913年版/参考文献[1]に62日分、1990年版/参考文献[2]に22日分)、その収録の際に若干の変更、編集を加えらるとともにそれぞれ題名が付された。以下、初出の際に参考として注で全集収録時の題名を挙げる。1900年3月16日のフェリエトンは「現代のスフィンクス Сфинкс современности」の題名で収録。
- (5) 1901年1月28日付フェリエトン—「ロシアのインテリについて О русском интеллигенте」
- (6) 1901年9月14日付フェリエトン—「自由飛行 Свободный полет」
- (7) 1900年10月29日付フェリエトン—「不協和音 Диссонанс」
- (8) 1900年8月13日付フェリエトン—「仲間内 В кругу」
- (9) 1901年2月11日付フェリエトン—「ロバ革の表紙 В переплете из ослиной кожи」
- (10) 1902年5月5日付フェリエトン—「些事の暴虐と個性の罪 Тирания мелочей и преступность индивидуальности」
- (11) 1900年11月12日付フェリエトン—「インフルエンザ患者、神経衰弱患者、アル中患者 Инфлуэнтики, неврастеники, и алкоголики」
- (12) 1900年12月24日付フェリエトン—「我ら生けるものが子豚料理を食べるとき Когда мы, живые, едим поросенка」
- (13) 1901年12月30日付フェリエトン—「陰の側の人々 Люди теневой стороны」
- (14) 「野鴨」については1901年9月30日、「人民の敵」については1900年10月29日、「我々死んだものが目覚めたとき」については1900年12月3日のフェリエトンでそれぞれ取りあげている。
- (15) 1900年9月17日付フェリエトンは1990年版全集に個別のものとしてではなく、「モスクワ、生活の些事 Москва. Мелочь жизни」の題名で、1902年1月27日のフェリエトンとともに収録されている。
- (16) 1901年11月4日付フェリエトン—「うまく生きることができなければ、死がうまくいくように Если жизнь не удастся тебе, то удастся смерть」

[参考文献]

- 1 Леонид Николаевич Андреев. Полное собрание сочинений. В 8-ти т. Спб.: Издание т-ва А. Ф. Маркс, 1913.
- 2 Леонид Николаевич Андреев. Собрание сочинений. В 6-ти т. М.: Худож. лит. 1990-1996.
- 3 Леонид Николаевич Андреев. Библиография. Выпуск 1. М.: Наследие, 1995.
- 4 Литературное наследство том 72. М.: Наука, 1965.
- 5 Вересаев В. В. Собрание Сочинений. В 5-ти т. Том 5. М.: Правда, 1961
- 6 Книга о Леониде Андрееве. Воспоминания М. Горького, К. Чуковского, А. Блока, Георгия Чулкова, Бор. Зайцева, Ч. Телешова, Евг. Замятина, Андрея Белого. Берлин -Пб.- М., 1922.
- 7 Иезуитова Л. А. Творчество Леонида Андреева. Ленинград.: Изд. Ленинградского университета, 1976.
- 8 Львов-Рогачевский В. Две правды. Книга о Леониде Андрееве. СПб., 1914.
- 9 Фатов Н. Н. Молодые годы Леонида Андреева. М., Земля и фабрика, 1924.
- 10 Kaun A. Leonid Andreyev. A critical study. London.: Benjamin Blom, 1924.
- 11 Woodward, J. B. Leonid Andreyev: A Study. Oxford: Clarendon Press, 1969.
- 12 Leonid Andreyev. Photographs by a russian writer: An undiscovered portrait of Pre-Revolutionary Russia. London: Thomes and Hudson, 1989.